

【論文9】

「半座を分かつ」伝承について

岩井 昌悟

【0】はじめに

[1] 摩訶迦葉は仏教教団の中でどのような地位にあったのか。この問題に関しては本モノグラフ所載の【論文8】「摩訶迦葉 (Mahākassapa) の研究」ではほぼ明らかにされている。それにもかかわらず、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつたという伝承をここに殊更に扱って拙論を立てるのは、以下のような理由による。

この「半座を分かつ」という表現は釈尊と摩訶迦葉との間に限定されず、誰々が誰々に「半座を分かつ」という伝承が多くの経典や説話文献に見られ、ひいては *Mahābhārata* などにも同様の記事が存する。本論はこれらを調査することによって「半座を分かつ」伝承の意味を明らかにし、そこから釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつたという伝承が摩訶迦葉にどのような属性を付与しているのか検討を加えようとしたものである。この作業は摩訶迦葉の人物像をより鮮明にすることに寄与するであろう。

また釈尊が摩訶迦葉に「半座を分かつ」という伝承は漢訳経典には数多く存するにもかかわらず、パーリ文献には見られないという重要な特徴を有する。このことから北伝と南伝との間に摩訶迦葉の教団内における位置づけに関して差異が存在した（北伝伝承が南伝伝承よりも摩訶迦葉を重視していた）といった見解も生じ得る。そのような見解が妥当か否かも、この研究によって判定を下せよう。

[2] 誰々が誰々に半座を分かつという行為は、現代の日本人にとって決して理解不能なものではないため、奇異な印象もなく自然に受け取られるかもしれない。

実際、「半座」‘ardhāsana’を Böhtlingk と Roth の *Sanskrit-Wörterbuch* で引いてみると ‘halber Sitz; einem Gaste die andere Hälfte des Sitzes anbieten gilt für eine grosse Ehre’ 「半分の席；客に席のもう一方の半分を提供することは大きな敬意を示す」とあり、用例として *Śākuntala*, *Raghuvamśa* (6.73)、*Kathāsaritsāgara* (17.110) が挙げられている。他の辞書もこれにもとづいている。*Śākuntala* には天界で帝釈天のもてなしを受けたドゥシュヤンタ (Duṣyanta) 王が帝釈天の半座に坐ったことが言及されており⁽¹⁾、*Raghuvamśa* にはラーマの祖父 (ダシャラタ Daśaratha の父) であるアジャ (Aja) が帝釈天の半座を占めたとあり⁽²⁾、*Kathāsaritsāgara* は一挿話の中で、人間の妻になった（しかし同衾はしない）天女ソーマプラバー (Somaprabhā) が姉の天女とならんで樹上の玉座に坐り食事をする場面を描いている⁽³⁾。*Kathāsaritsāgara* の用例は姉妹の関係にある2人であるから一つ座に坐っても特別な意味はないとも考えられるが、*Śākuntala* と *Raghuvamśa* の用例では帝釈天が「大きな敬意を示」して人間界のすぐれた王に半座を分かつと理解できよう⁽⁴⁾。

しかしながら、釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつのは単なる「大きな敬意を示す」どころで

はすまされないように思われる。なぜなら釈尊が半座を分かっただけは摩訶迦葉ただ一人であり、二大弟子の舍利弗・目連でさえもそのような榮譽に預かってはいないからである。

「半座を分かつ」行為には我々が自然に受け取ることができるよりも、もっと重要な隠された意味が含まれているのではないであろうか。

- (1) *The Abhijñānaśākuntalam of Kālidāsa*, edited by Kale, tenth edition, 1969, p.252; mama hi divaukasām samakṣam ardhāsānopaveśitasya.

antargataprārthanam antikasthaṃ jayantam udvikṣya kṛtasmitena /
āṃṣṭavakṣoharicandanānkā mandāramālā hariṇā pinaddhā // 2 //

神々の前で、私（ドゥシュヤンタ王）が〔帝釈天の〕半座に着座した時に、

〔ドゥシュヤンタ王と同様に扱われたいという〕願望を内に秘めて傍らに立つ〔息子の〕ジャヤンタを見やって、微笑を浮かべつつハリ（帝釈天）は、胸〔に塗った〕ハリチャンダナが擦れて印がついたマンダラ花の華鬘を編んだ。

- (2) *The Raghuvamśa of Kālidāsa*, critically edited by Rewā Prasāda Dwivedī, New Delhi, 1993, p.196

airāvātāsphālanaviślatham yaḥ saṃghaṭṭayann aṅgadam aṅgadena /
upeyuṣaḥ svām api mūrṭtim agryam ardhāsānam gotrabhido 'dhitaṣṭhau // 73 //

彼（アジャ）は、アイラーヴァタ象が耳をバタバタと打ち合わせるのにもなって揺れる〔帝釈天の〕腕輪と〔自身の〕腕輪がこすり合う〔ほど帝釈天に身を寄せ〕、〔帝釈天は〕自身〔と同じ〕最上の容姿の〔アジャに〕身を寄せて、〔アジャは〕牛群を開放する者（帝釈天）の半座を占めた。

- (3) *Kathāsaritsāgaraḥ*, Motilal vanarsidass, Delhi, 1970, p.058.

atraivāruhya vṛkṣe ca tasyā ardhāsāne tadā /
upaviṣṭhām svabhāryām tām guhacandro dadarśa saḥ // 110 //
tatkālam tulyakānti te saṃgate divyakanyake /
paśyatas tasya bhāti sma sā tricandeva yāmini // 111 //

そこで樹に登って半座に坐っている自身の妻をグハチャンドラは見た。

その時、等しく美しい、いっしょにいる2人の天女を見ている彼には、夜は3つの月が出ているかのように見えた。

- (4) なお本論で述べることの先取りになるが、ここに挙げた3例について、*Śākuntala*の例は以下の【3】見る、父が息子に半座を分かつケースに対応する。ドゥシュヤンタ王は帝釈天の息子であるジャヤンタの代わりに半座を分かたれているからである。*Raghuvamśa*の例は半座を分かつ者と分かたれる者の容姿が等しいケースであり、*Kathāsaritsāgara*の例は一つ座を共有する2人が、容姿が等しく同等の権限・地位を共有するケースに対応すると見ることができよう。

【3】本論の担当執筆者（岩井）が、かつて自身の修士論文「アヴァダーナ・カルパラター第4章マーンダートリ・アヴァダーナ研究」の準備のためにマーンダートリについて資料整理を行ったことがあり、マーンダートリが帝釈天から半座を提供されることについての資料がすでに手元にあった。そこで、【論文8】の準備中に我々の定例研究会で摩訶迦葉の半座が問題になった時に、両者の比較を通して「半座を分かつ」伝承の意味を探れないかということになり、それが本論の出発点になった。

その後、マーンダートリと摩訶迦葉の資料の他にも「半座」が言及される資料があれば考察に益すると思ひ、仏教文献については『大正新脩大藏經』テキストデータベース（SAT）

および中華電子仏典協会 (CBETA) の電子テキストを、*Mahābhārata* と *Rāmāyaṇa* については *The Machine-readable Text of the Mahaabhaarata, Based on the Poona Critical Edition, Produced by Muneo Tokunaga, Kyoto, Japan, Completed on November 14, 1991, The first revised version(V1): September 16, 1994, Upgrade version(1_1): October 1, 1996* と *Machine-readable Text of the RaamaayaNa, produced by Muneo Tokunaga, Kyoto, Japan, March 12, 1993* を利用させていただくなどして資料の補充に努め、特に *Mahābhārata* については故上村勝彦先生の和訳を大変役立たせていただいた。

チベット訳資料やブラーフマナ、プラーナ等を概観できれば資料はもっと増えると予想されるが、それは担当執筆者の手にあまるので、はなはだ不完全ではあるが、【論文8】に合わせる形での刊行となった。

なおこの研究では原則として中国および日本撰述の典籍は無視した。この研究にとってはインドの文脈における「半座」の意味合いが重要であり、中国撰述の典籍を視野に含めると範囲が大きくなりすぎ、めざすものがはっきりしなくなると思われるからである。

しかしながら釈尊が摩訶迦葉に半座を分かつ伝承については、末尾に【付録】として中国撰述の資料を挙げた。